

◆今回の河内さんのエッセイは戦争中の子どもの思いがつつられており、興味深かった。次号(下)もお楽しみに。長い文章もインターネット版では問題なく、利点を生かした号となった。

◆五月の半ば、友人とそのお連れ合いの散骨に参加した。酒田の海である。埼玉から引越して酒田の隣、遊佐町に十年以上暮らした二人だった。いわゆる事実婚。「展景」の同人でもあった鈴木京子さんはがんで亡くなった。そのあとお連れ合いのことを心配していたが、彼には応援するサッカークラブ・浦和レッズがあり、居を移した埼玉にも友人がいた。なんとか大丈夫だろうと思っていた矢先、彼もがが見つかってこの一月に急逝した。昨年六月、遊佐の帰りに山形市に寄ってくれて、サッカーの話をしたばかりだったのだ。亡くなるまでの間、友人たちに手続きその他を託していたのだという。それで、酒田の海へ散骨することになった。チェ・ゲバラを敬愛していた彼だが、さすがに南米まで散骨に行ける人はいなかったらしい。

前もって連絡が入り、散骨が波の関係で翌日に変更になっていた。前日の晩、遊佐町で「二人の思い出を語る会」が行われた。関東から友人や知人が参加し、地元の人も多く三十人が集まった。映像が流され皆さんの話を聞くうちに、京子さんたちが遊佐の人たちとどのように接してきたかを改めて知ることになった。よそ者は大事だと思った。地元の人たちは従来の生活だけでは気づか

いことがあり、別の見方による刺激や発見がそこにはあった。よそ者との交流によって相乗効果が出る。京子さんたちは地方の生活を楽しみながら、多くのことを遊佐の人たちに残した。町のIJUターン促進の仕事をしている女性は「移住者へのアドバイスとして、京子さんがしていた複数の働き方を紹介している。京子さんがいなかったら、いまの自分の仕事はない」と言った。

散骨に参加するメンバーは翌日の十時前に酒田マリナーに集合した。天気は薄曇り。参加者としてプレジャーボートに乗れるのは七人。船の人と会社の人で三人。散骨を行う会社では全国の港を対象にしているが、酒田では初めてだとのこと。予定は九十分。見送りの人たちもいる。港を出ると、鳥海山が大きく迫ってくる。田植えの時期に現れる雪形「種まき爺さん」も見えた。波は前日の三分の一だという。外海に出て近くに漁船などがないかを確認してから散骨した。お骨は水性の袋に入っていた。あらかじめ埼玉でお骨を細かく砕く工程を終えていた。七人が持った袋は、すうーっと海に沈んでいく。お花も花びらだけ。風下に向かって撒いた。花が広がっていった。黙祷し、付近を回ったあと港へ戻った。散骨は無事に終わった。雨は降らなかった。宗教色がなくてよかったという感想もあり、なにかすがすがしい感じがした。前夜の思い出を語る会も含めて、二人にきちんとさよならができた気がした。

リクエストがあったので、鈴木京子さんのエッセイ集『鳥海山録だより』（頒布価格五〇〇円）を増刷。ご希望があれば、ご連絡ください。

(布宮慈子)

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊展景 90号

二〇一八年六月三十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一ー七ー二〇二

info@muninokai.com